

トカラ中之島・口之島における考古学的分布調査

渡辺芳郎

Archaeological Survey of Nakanoshima and Kuchinoshima in Tokara Islands

WATANABE Yoshiro

鹿児島大学法文学部

Faculty of Law, Economics and Humanities, Kagoshima University

要旨

2016年に実施したトカラ中之島と口之島での分布調査成果の概要を報告する。以前の陶磁器採集地点に加え、新たに各島2地点で散布が確認できた。また近世トカラにおける陶磁器流通の具体相（白薩摩の使用状況、清朝色絵磁器の流通など）について新発見も得られた。

はじめに

筆者は2011年以来、トカラ列島（鹿児島県鹿児島郡十島村）における考古学的調査を継続している。その一環として、2016年に中之島と口之島において分布調査を実施した。両島では以前にも分布調査を行っているが（渡辺編2015）、新たな地点において新発見も得られたので、その概要を報告する。

方法

2016年5月7・8日に中之島の、同年6月18・19日に口之島の分布調査を筆者単独で実施した。調査の中心は両島の集落部で、これまでの調査により現在の集落と近世のそれとは立地的に大きな差異がないことが推測されるからである。ただし既調査地点以外の地域も意識的に踏査した。

結果と考察

中之島（図1）：既知の採集地点2地点（No.1・8）

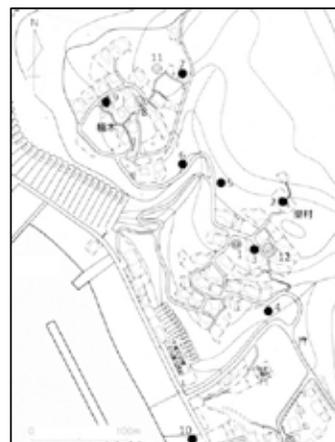


図1 中之島陶磁器採集地点

●：渡辺編2015での採集地点

◎：今回の採集地点（一部●と重複）

と新規の2地点(No. 11・12)において計29点を採集した。日本の中世段階の陶磁器としては、福建省漳州窯などの中国青花磁器がある。近世になると、磁器では肥前の染付がもっとも多く、18世紀末以後の薩摩磁器が加わる。陶器としては薩摩焼の堅野系白薩摩碗(染付「千鳥印」)、苗代川の甕・片口・土瓶、関西系の碗などが見られる。

白薩摩碗(図2)の採集地点No. 11の近傍には墓があり、同一地点で肥前磁器の染付仏飯器も採集していることから、墓地への供献品が廃棄されたと推測される。諏訪之瀬島切石遺跡では、白薩摩碗が3点、奉納品として埋納された可能性があり(大橋・山田 1995)、今回の採集資料も近世トカラにおける白薩摩の扱われ方を考える上で興味深い。

口之島(図3): 既知の採集地点8地点(No. 3・4・9・11・14・20)と新規の2地点(No. 21・22)において計79点を採集した。日本の中世段階の陶磁器として中国竜泉窯の青磁、漳州窯の青花磁器などとともに、国産陶器の備前摺鉢を採集した。近世では、磁器として肥前と薩摩の染付磁器、中国の青花磁器と色絵磁器がある。陶器には肥前内野山窯の銅緑釉碗、加治木・始良系の蛇の目釉剥ぎ碗、肥前の摺鉢、苗代川の摺鉢・甕・土瓶などがある。このほか明治27(1894)年に平島に漂着した清国船の搭載品と考えられる粗製の中国青花磁器(新里 2016)がある。

18世紀の徳化窯産と推測される清朝色絵磁器碗(図4)は、前回の調査に続いて口之島では2点目の採集である。前回の資料とは採集地点も異なり(前回No. 11、今回No. 3)、接合もしないが、色絵の発色や胎土の色調、わずかに外反する口縁部の反り具合などに共通点が見られ、同一個体の可能性がある。類例は沖縄那覇の首里城真珠道跡から出土しており、また今のところ他島では確認されていない(渡辺編 2015)。近世トカラ社会における口之島の位置を考える上で手がかりとなる。



図2 中之島採集白薩摩碗



図3 口之島陶磁器採集地点
●・◎: 図1と同じ



図4 口之島採集清朝色絵磁器碗
(左: 今回、右: 前回)

引用文献

- 大橋康二・山田康弘 1995. 鹿児島県鹿児島郡十島村諏訪之瀬遺跡出土の陶磁器. 貿易陶磁研究, 15:141-164
- 新里貴之 2016. ピーピーどんぶり考. 鹿児島考古, 46:77-92
- 渡辺芳郎編 2015. 近世日本国家領域境界域における物資流通の比較考古学的研究. 平成24~26年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書. 144頁, 鹿児島大学法文学部, 鹿児島.